博士論文審査結果報告書

倉林秀男

言語学的文体論からみるアーネスト・ヘミングウェイの文章構成原理の探求
Linguistic Stylistics: Its Development and Application
to the Craft of Ernest Hemingway's Prose Style

（2017 年、240 頁）

審査論文の要旨

本論文の目的は、言語学の見地を踏まえた文体論が文学にも適用可能であるという前提の下、アーネスト・ヘミングウェイの作品の分析に新たな光を当て、言語学的手法による文学テクスト分析が作品解釈のみならず、彼の文章構成原理を明らかにすることに有効であると示すことにある。

第 1 章では、これまでの文体分析の手法を概観し、文学の言語の特徴の一つとしてメタファーに焦点を合わせ、Lakoff and Johnson (1980) らによるメタファー研究をもって、文学研究に言語学研究を接続する有用性が示され、続いて澤田治美 (1993)らの視点、Leech and Short (1981) の話法の研究などについて、既存の文学研究と言語学研究を比較しつつ、前者の主観性や曖昧性を後者によって補完する有用性が論じられる。

第 2 章は、「ヘミングウェイスタイル＝ハードボイルド」言説について整理し、ヘミングウェイを「ハードボイルド」作家と呼ぶ定義がきわめて曖昧であるとし、テクストを言語学的に忠実に読み直すことで再考し、ハードボイルドと言われてきたがゆえに看過されてきたヘミングウェイ式の「意識の流れ」を描写する表現スタイルが、彼の特徴的文体のひとつではないかと主張する。

第 3 章は、ヘミングウェイ作品の曖昧性を巡る考察で、彼のスタイルは、例えば it や that を多用して物語内容を意図的に曖昧に解釈されるようにしていると評されるが、それらが単なる指示機能語であるがゆえに内容が不明確であると解するよりも、Kamio and Thomas (1999)らの考察に基づき、it と that という記号のもつ本質的意味の違い、即ち it は既知情報を that は興味・関心が集中していることを示すのを頼りに説明することができると論じる。そしてこの差異に、発話者の主観的な判断を表す助動詞が加わるとき、発話者の心の機微が詳細に描かれることになることを「海の変容」や「白い像のような山並み」といったテクストを例にして述べる。ここにヘミングウェイの曖昧性の特徴の一つが見出されている。文字言語は、声の大きさやトーンやイントネーションから発話者の心的態度を推測することが困難であるが、語用論や意味論から分析することによって、登場人物の心の機微を探ることが可能となる。それゆえ、曖昧性を巡る本章は、文学研究における言語学的見地の有意義性が証明される論考ともなっている。

第 4 章では、高校時代の創作を取り上げ、言語学の見地から展開された前章までの考察結果と高校時代の作品を比較する。そして、コーパスを用いた語彙の分析を取り入れたり、構文的特徴に注

目する新しい手法をとったりすることによって、「シンプルスタイル」や「省略の文体」などのヘミングウェイのスタイルは、通説のパリ時代よりもっと早い高校時代の創作活動期の作品に既にその萌芽が見出されると言う。

第 5 章と第 6 章は、登場人物間の人間関係について、意味論や会話分析（とくにポライトネス）から分析が行われる。第 5 章では、主に Halliday and Hasan (1976) による結束性ならびに久野暲と高見健一 (2001) の情報構造を巡る理論を基盤にし、一般に旧情報を示す定冠詞と新情報を示す不定冠詞を巧みに用いることで、登場人物の視点が操作されていることが指摘される。このことをもって、登場人物に対立構造をもつヘミングウェイの作品について、対立構造が単語の語彙だけでなく、不定冠詞と定冠詞の巧みな技法からも生じていることを意味論の見地から論証し、先行する文学研究の説を補完している。第 6 章では、「フランシス・マカンバーの短い幸福な生涯」を取り上げ、ポライトネスや会話の公理から逸脱する言語表現を用いることにより、あるいはモダリティや話法の観点から登場人物自身の語る言葉によって人間関係の変化を示し、登場人物同士の力関係が移動していることを確認する。これらの確認を通して、作品内に二項対立の図式を持ち込んで解釈するのは無理があることを指摘し、先行する文学研究のほとんどの議論が結末部のフランシスの死を巡る解釈、すなわち意図的なのか偶発的なのか、いずれが正しくていずれが間違っているのかといった二項対立的議論そのものが無意味であるという新たな見解を示している。

審査の総評

以上のように、倉林秀男氏は、その文体によって文学史上重要な地位を占めるヘミングウェイのテクストを、最新の言語学の知見から精緻に分析して客観的な文体研究ならびにそこから結論づけられる作品の評価や解釈を行った。この分析方法による最も大きな成果は、「ハードボイルド」と一般に呼ばれるヘミングウェイの文体は、感情が抑制されたものではなく、むしろ心の機微を克明に描いているという発見である。また、各作品の言語学的見地から見た文体的特徴だけでなく、高校時代の習作期の作品から通時的に分析を行うことにより、ヘミングウェイの文体が定説とは異なり、高校時代にある程度完成していたことを見出した。こうしたことは、ヘミングウェイの文体研究はもちろん、作品解釈、ひいては「ハードボイルド」の定義の再考をも促す結果となり、ヘミングウェイ研究や文学研究を新たな方向性に導く論考と言える。

また、本論は、文学と言語学の接続の有意義性、文体研究の今後の意義と可能性、そして文学研究の新たな方向性をも示すことができている。アメリカ比較文学会は定例報告書で「文学性の言語学」について見直していこうと提言した。文学研究がテクストの一言一句に依拠する限り、精緻な読みと分析が作品論にも重要であることは言うまでもない。著者が主張するとおり、言語学だけがすべてではないが、文学理論と言語学の理論が相補的に用いられることが今後の一つの方向性になっていくであろう。

以上の研究成果と今後のヘミングウェイ研究ならびに文学研究への波及効果から、審査委員は全員一致して本論が博士（英語学）の学位に十分値するものと判断する。